

あとがき

国分寺市民連合共同代表／弁護士 梓澤 和幸

2021年総選挙で市民と野党の共闘が勝ち抜いた豊かな経験は力を与える。市民一人ひとりの熱量が結集した市民連合が中軸となって小選挙区の市民・野党の政策協定と候補者を決めてゆく過程の熱っぽさと手順の手堅さは胸を動かす。

獲得議席から見ればそれは未完の課題だった。しかし渦中でやり切った人々にとってはこの国を変えて行けるという光に向かったスタートであったことは間違いない。

本書は何を語っているだろうか。

市民と野党の共闘はようやく端緒につき、しかも重要な果実を得たということである。

その典型は県内の小選挙区で4対2の市民派勝利を収めた新潟だと思う。その経験をまとめた文章のタイトルは「『政権交代、果たした市民連合@新潟の経験』(本書第3章)とされている。この新潟でも楽勝の選挙区は一つもなく、勝利も最後の最後まで競って数百票の差でせり勝った選挙区が2つもあったという。そして6つの選挙区のどこでも市民連合は政治のアマチュアとしてプロの政党政治家と根気強く、継続的に協議を重ねた。

そのうえで市民と野党の共闘勢力が与党勢力と互角に戦ったという。

執筆した佐々木寛さんの言葉をひこう。

イデオロギーの右左を見るのでなくもっと上位の理念を体現する市民が立ち上がっているのだということをしっかり自覚し、表現してゆくということが重要です。

私も東京19区(国分寺、小平、西東京)で市民と野党の共闘候補を擁してたたかい、2000票の差で競り勝ったが、佐々木さんの言葉はいちいち胸に響いた。

野党共闘攻撃は半端ではなかった。あたかも大きな政治的過誤とでも言いたそうな。しかしこの共闘体験は未熟ではあっても過ちではなく、スタートを切ったということが大切なことだ。

次に体験を通して言えること。大きな目標に向かって進むとき、考え方、生き方、イデオロギーの違いを乗り越えて親しくなり、やがて合意を形成する。その上で勝つ喜びの深さだ。

市民連合がはじまる発端は2011年の福島第一原発過酷事故以来の被害者救援、再稼働反対や2015年の安保法制一戦争法反対運動にさかのぼるだろう。

こんなことがあった。

福島第一原発事故が発生した2011年の6月、私の住む国分寺市から隣の国立市にむけて約300人の市民行進があった。沿道の店舗のお客さんが手を振ってくれたり、アンダーシャツを着た長身、白髪の男性が住宅の2階から近所の人には見えないように気遣いながら、両手を大きく広げてゆっくと手を振ってくれた。デモ行進を無数に体験してきたが、商店街や居住地の中でこれだけ包み込まれる雰囲気を感じたことはなかった。

最後尾を歩んでいた私に「あのう」という声がかかった。振り向くと30代半ばの男性が真剣な面持ちでためらうように言葉をつづけた。

「これどこかの政党がやっているんですか」。政党の主催ではないと説明すると少し表情の緊張がゆるんだ。「小さい子どもがいて、原発は他人事ではないのです。それならば」と語った男性とご家族のその後の10年を思う。

2015年安保法制強行採決のときの同様の情景は本書第9章に書いた。

これでもか、これでもかというほどの与党と政権のひどい仕打ちのこの10年。人々は誰かに組織されてというよりは一人ひとりが自ら立ち上がることに目覚めた。選挙という否が応でも政党や政治家の選択を迫る出来事のように、自己の信条や支持政党の基本目標とは全部一致するわけではない「何か」に思いを寄せることを覚悟する妥協と合意。それを確認したうえで統一候補を決め、政策協定を作って進む体験を全国各地の市民連合が一斉にシェアすることは初めてだった。それは生半可の努力ではできないことであった。

この「何か」を高校生にもわかってもらえる普通の言葉でやさしく語りえたときに、これに賛同し、共同の行動に歩みだす人々の幅がぐんと広がる。こういうときに、心こめて投票に向かう人、選挙にとりくむ市民連合に共感してくださる無党派層、支持政党なし層は大きく拡大するのではないだろうか。

本書で紹介されている新潟、福島、東京5区、6区、8区、沖縄の勝利の経験や我が東京19区の体験に照らしてそう思う。

参議院選挙では、与党勢力、補完勢力の戦術選択の如何を問わず9条、緊急事態条項加憲という争点がせりあがることは間違いない。

憲法問題は政治問題とは違う。自らの支持する政党の賛否、政党への支持の有無をこえて原発、2015年安保法制のときのような拡がりを獲得できるはずだ。戦争と独裁につながる改憲はいやだ。そのことを市民連合も加わって市民と野党の腹の底からの一致点にしたい。総選挙における共闘が未完であったその分、「逆ばね」が爆発的に働いても不思議ではない。

参議院選挙の先にもコロナ渦での健康と安全、気候変動と環境。生活の維持、困窮者の支援、「改憲発議」などと人々が助け合わなければ生きてゆけない時はまだ続いてゆく。

ゆりかえし、一時的後退、分断はあるかもしれない。しかし、同様の困難を乗り越えて連帯し、友情を築き勝利した市民と野党共闘勝利の経験は、語りつがれ次の取り組みの財産となるはずだ。本書はそのことに貢献したい。

闇の中で光を語れる言葉をもとう。

1963年8月28日 ワシントンで開かれた100万人の黒人公民権実現行進の中央集会でマーチンルーサーキング牧師が残した言葉。本書を手にとってくださったあなたにこの言葉を届けたい。今この文を書く私にも、当時20歳の学生だった私にも、向けられた言葉だという思いを込めて。

私には夢がある。いつの日か、州権優位論と連邦法の実施拒否と口にする知事のいるアラバマ州が黒人の少年や黒人の少女が、白人の少年や白人の少女と兄弟姉妹になって手をつなぎ、一緒に歩くような状況に変貌するのです。私には夢がある。いつの日か、あらゆる谷間は高く上げられ、あらゆる丘や山は低くならされ、起伏のある土地は平原となり、曲がった道はまっすぐならされるのです。神の栄光は示されあらゆる人間が神の栄光と一緒に見るのです。

これがわれわれの希望です。この信念で私は南部に戻ってゆきます。この信念でわれわれは絶望の山から希望の石を切り出すのです。(荒このみ編訳『アメリカの黒人演説集』岩波文庫、282ページ)